

支持することはマイナスであると考えたためです。

敬虔なユダヤ教徒が「シオニストはユダヤ人ではない」と考えたことから分かるように、シオニズムを推進した人々は、同化ユダヤ人で、非宗教的な人たちでした。なので、ユダヤ国家を創ろう、どこに創ろうかと考えた時、ヘルツルは帝国に援助を乞います。イタリアはリビアの辺りはどうかと提案し、イギリスは当時の英領ウガンダを提供すると言ったりしました。なぜイタリアやイギリスに、リビアやウガンダを勝手にヨーロッパのユダヤ人に提供する権利があるのか。まさに植民地主義です。シオニストのユダヤ人もそれを当然と考えていました。

植民地主義としてのシオニズム

正統派ユダヤ教徒がシオニストを「もはやユダヤ人ではない」と見なしたように、彼らは、「神がユダヤ人に与えた約束の土地である」という宗教的な熱情に駆られてパレスチナでの国家建設を計画したわけではありませんでした。しかし、シオニズムに対するユダヤ人の支持を集めるため、政治的に、聖書の神話的物語を利用しました。

ヤコヴ・ラブキンさんという、カナダ在住の正統派ユダヤ教徒の歴史学者がいます。ラブキンさんが京都大学で講義してくださった際に紹介してくれた、イスラエルのジョークがあります。「シオニストは、神の存在は信じていないが、『パレスチナは、神がユダヤ人に与えた約束の土地である』ということには信じている」

イスラエルがどういう国なのかは、東京大学の鶴見太郎さんが『ロシア・シオニズムの想像力』（東京大学出版会）、『イスラエルの起源』（講談社選書メチエ）という本を書いておられます。ヤコヴ・ラブキンさんにも、シオニズムの誕生以来、正統派ユダヤ教徒がシオニズムに反対してきたことを論じた『トーラーの名において』（平凡社）や『イスラエルとは何か』（平凡社新書）という本がありますので、詳しくはこれらをお読みいただきたいと思います。

ヨーロッパのユダヤ人が、パレスチナという、アラブ人がもともと住まうアジアの土地に、ヨーロッパ人である自分たちの国を創るということ。これは何を意味しているのでしょうか。

まずここで強調したいのは、彼らがなぜそんな発想に至ったかということ、一つは、西欧社会が近代市民社会になっても、ユダヤ人差別、反ユダヤ主義という、ヨーロッ

パ・キリスト教社会の歴史的な宿痾しゅくあを克服することができなかつたから、ということ
です。ヨーロッパのユダヤ人は、ヨーロッパにおける反ユダヤ主義というレイシズム、
人種主義の犠牲者です。それは間違いありません。

でも、彼らシオニストのユダヤ人たちは、自分たちの人間解放を目指した時、帝国
の武力を背景にして、パレスチナというアジアの、アラブ人が暮らす土地に、ヨー
ロッパ人である自分たちが武力でもって国を創るということをなんら怪しみませんで
した。つまり当時のヨーロッパ人が持つ、アラブ人、ムスリム、アジア人などに對す
るレイシズムと、ヨーロッパ人、西洋白人が軍事力の行使によって彼らの土地に自分
たちの国を持つのは当然だとする植民地主義の精神を、シオニストたちもまた、当然
のこととして共有していたということなのです。

パレスチナの分割案

二十世紀の前半、ヨーロッパ・キリスト教社会において連綿と続いてきた歴史的な
ユダヤ人差別、そして近代における反ユダヤ主義の頂点をなす出来事として、ナチス・

ドイツによるユダヤ人のジェノサイド、いわゆるホロコーストが起ります。その結
果として、第二次世界大戦後のヨーロッパで、二十五万人のユダヤ人が難民となつて
いた、ということはずでに述べました。

このユダヤ人難民問題をどうやって解決するか、ということでも国連がとつた解決策
が、「そつだ、シオニズムがあるじゃないか。パレスチナにユダヤ人の国を創るとい
うこの運動を利用しよう」というものでした。

前述したように、シオニズムは誕生当初、熱狂的にこれを支持した人たちもいたと
はいえ、ユダヤ人の間で人気がありませんでした。十九世紀末にシオニズムが誕生し
てから五十年経つても、パレスチナに入植するヨーロッパのユダヤ人は六〇万人ほど
でした。その多くは、シオニストだからパレスチナに来たのではなくて、一九三〇年
代以降、ナチスの台頭によってヨーロッパにすることが危険になり、やむなくパレス
チナに逃げてきた人たちです。

当時、パレスチナ人（アラブ人）の人口は一二〇万人ほどです。ユダヤ人が六〇万
人なので、ユダヤ人はパレスチナの総人口の三分の一です。また、ユダヤ人がそれま
でに購入して所有していた土地は、全体のわずか六パーセントでした。

P 55の地図は、歴史的パレスチナにおけるパレスチナ人の領土の変遷、パレスチナ

パ・キリスト教社会の歴史的な宿痾しゅくあを克服することができなかつたから、ということ
です。ヨーロッパのユダヤ人は、ヨーロッパにおける反ユダヤ主義というレイシズム、
人種主義の犠牲者です。それは間違いありません。

でも、彼らシオニストのユダヤ人たちは、自分たちの人間解放を目指した時、帝国
の武力を背景にして、パレスチナというアジアの、アラブ人が暮らす土地に、ヨー
ロッパ人である自分たちが武力でもって国を創るということをなんら怪しみませんで
した。つまり当時のヨーロッパ人が持つ、アラブ人、ムスリム、アジア人などに對す
るレイシズムと、ヨーロッパ人、西洋白人が軍事力の行使によって彼らの土地に自分
たちの国を持つのは当然だとする植民地主義の精神を、シオニストたちもまた、当然
のこととして共有していたということなのです。

パレスチナの分割案

二十世紀の前半、ヨーロッパ・キリスト教社会において連綿と続いてきた歴史的な
ユダヤ人差別、そして近代における反ユダヤ主義の頂点をなす出来事として、ナチス・
ドイツによるユダヤ人のジェノサイド、いわゆるホロコーストが起ります。その結
果として、第二次世界大戦後のヨーロッパで、二十五万人のユダヤ人が難民となつて
いた、ということはずでに述べました。

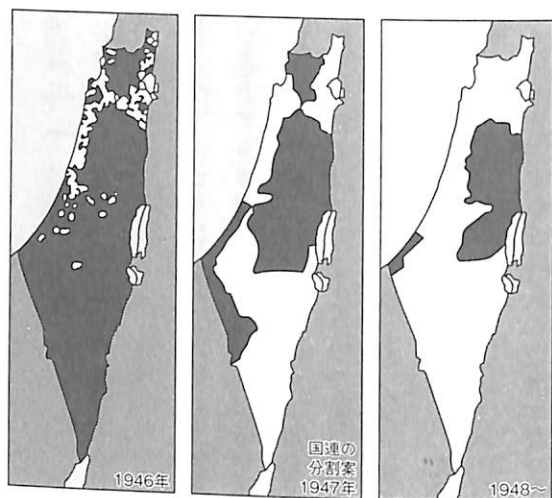
このユダヤ人難民問題をどうやって解決するか、ということでも国連がとつた解決策
が、「そうだ、シオニズムがあるじゃないか。パレスチナにユダヤ人の国を創るとい
うこの運動を利用しよう」というものでした。

前述したように、シオニズムは誕生当初、熱狂的にこれを支持した人たちもいたと
はいえ、ユダヤ人の間で人気がありませんでした。十九世紀末にシオニズムが誕生し
てから五十年経つても、パレスチナに入植するヨーロッパのユダヤ人は六〇万人ほど
でした。その多くは、シオニストだからパレスチナに来たのではなくて、一九三〇年
代以降、ナチスの台頭によってヨーロッパにすることが危険になり、やむなくパレス
チナに逃げてきた人たちです。

当時、パレスチナ人（アラブ人）の人口は一二〇万人ほどです。ユダヤ人が六〇万
人なので、ユダヤ人はパレスチナの総人口の三分の一です。また、ユダヤ人がそれま
でに購入して所有していた土地は、全体のわずか六パーセントでした。

P 55の地図は、歴史的パレスチナにおけるパレスチナ人の領土の変遷、パレスチナ

パレスチナ人の領土の変遷



濃い部分がアラブ国家、
白い部分がユダヤ国家

の地域の人々の国を創るために、委任統治システムがあるのであるではありません。アドホック委員会は、分割案は国連憲章違反である、国際法にも違反している可能性があるるので、国際司法裁判所に諮^{はか}るべきである、つまり、法的に違法だと結論づけます。また、経済的には、ユダヤ国家は良いが、アラブ国家は持続不可能になると指摘しました。

さらに、アドホック委員会は、ヨーロッパのユダヤ人難民問題は関係当事国が可及的速やかに解決しなければならぬが、それをホロコーストとならぬ関係のないパ

人の土地がいかに縮減していったかを示したのですが、左から二番目にあるのが、一九四七年の国連総会で採択された分割案の地図です。一つに分けるといってもスパツと南北に分けるわけではなく、白の部分がユダヤ国家で、塗りつぶされた部分がアラブ国家です。

ユダヤ人人口が多い地域はなるべくユダヤ国家に組み込んで、アラブ人の人口が多いところはアラブ国家にすることによってこのような形になっているのですが、人口的に三分の一、土地に関しては、左端の地図が示すように数パーセントしか持っていなかったユダヤ人に、歴史的パレスチナの半分以上の土地を与えるという案でした。

この分割案が四七年十一月二十九日に国連総会にかけられる前に、国連は特別委員会を設けて、この分割案についてアドホック委員会に検討させています。アドホック委員会は分割案を子細に検討して、結論を出しました。

第一次世界大戦でオスマン帝国が敗れ、オスマン帝国内であった東地中海のアラブ地域をフランスとイギリスが植民地分割した結果、パレスチナは当時、国際連盟による委任統治という名の、イギリスの植民地になっていました。

しかし、委任統治というのは、その土地の住民が独立できるようにするまで国連が別の国（この場合はイギリス）に統治を委任するというものです。どこかまったく別

レスチナ人に代償を支払わせる形で、パレスチナの地にユダヤ人の国を創って解決しようなどというのは、政治的に、端的に言って不正 (unjust) であると言いついています。そして、こんな分割案は採択されたとしても機能しない (unpractical) と断言しました。

パレスチナ分割は、国連憲章違反であり法的に違法、アラブ国家は経済的に持続不可能、政治的には不正——これがアドホック委員会の結論です。ところが、アドホック委員会がこのように結論づけた分割案が、特別委員会で可決され、総会にかけられて、ソ連とアメリカの多数派工作によって賛成多数で可決されてしまいます。

七十六年後の今、振り返れば、まさにこのアドホック委員会の結論こそ、正しかったと分かります。こんなことは機能しないとアドホック委員会が断言したとおりになりました。そして、今、第二のジェノサイドが起きてしまった。第二次世界大戦後、発足したばかりの国際連合は、誕生してわずか数年で、自らの憲章の精神を裏切る決議を行ったということです。

「アラブは分割案を受け入れなかった」などと言われますが、アドホック委員会のこの結論を見れば、なぜアラブ人がこんな不正な分割案を受け入れて、自分たちが暮らす土地にヨーロッパのユダヤ人の国を創ることに同意しなければいけないんだと、そう思っただけではないでしょうか。

この分割案が採択されたことに対して、のちにイスラエルの初代首相となるシオニズムの指導者、ベングリオンは何と言ったのでしょうか。

地図上のアラブ国家の部分に住むのはほぼ一〇〇パーセントアラブ人ですが、ユダヤ国家の部分に住むユダヤ人は六〇パーセント程度で、残り四〇パーセントはアラブ人です。

ベングリオンは、「たとえユダヤ国家ができたとしても、ユダヤ人の人口が六割では、安定的かつ強力なユダヤ国家にはならない」と言いました。言い換えれば、安定した強力なユダヤ国家にするためには、ユダヤ国家の領土にいるアラブ人を可能な限り排除しろということです。つまり、民族浄化の教唆です。

パレスチナを襲った民族浄化——「ナクバ(大災厄)」

国連総会がパレスチナの分割を決議した四七年十一月末から、四八年五月のイスラエルの建国を挟んで四九年の年明けまで、一年以上にわたり、パレスチナの各地で、

ガザとは

何か



パレスチナを

知るための緊急講義

早稲田大学教授
岡 真理

パレスチナ問題は
決して
“難しく”ない

早稲田大学^(10/23)、
京都大学^(10/20)の
講義に加筆・収録

「まずここから」の一冊

今
起きて
いる
こと
の

歴史的
文脈と

ポイント

が
わ
か
る

緊急
出版!

大和書房